

大乘菩薩道の提唱 本格的な生活

強い生き方	三
人生の肯定	十一
他力本願の生活	十八
四聖諦と他力本願の生活	四〇
十二因縁と無我	八一
六波羅蜜と他力真宗	九一
檀那波羅蜜	九四
尸羅波羅蜜	一一八
闍提波羅蜜	一四四
毘梨耶波羅蜜	一六四
禪那波羅蜜	一七四
般若波羅蜜	一九二

明けましておめでとう。いよいよ我々光明団員の活躍すべき年が来ました。同朋と共に昭和七年の新春を迎え、手をくんで大乘仏教のために大活躍すべき使命の前に立たされたことをよろこばずにはいられません。全国聖戦線の陣営を守る諸法兄弟のこの上の大奮闘を切念致します。

本部では十二月三十日午後一時より七時迄、本部会議を開き過去を清算し、昭和七年捲土重来の具体的協議会を開きました。そして個人間の色々な問題をも全部清算して、一同が綺麗さっぱりとした気分で新年を迎えました。三十日は特に忘年会を致しましたが、誰にでも嫌な思いや情けない問題の余燼があるものですが、それらを全て忘れて水に流すことは大切なことでもあります。忘年会の意義はここにあると思います。

世界的不景気、失業群を背負ったまま新年は来しました。叫ぶもの叫ばぬもの、運動するものしないもの、色々な逼迫した世相ではありますが、誰の力でも今日のこの行き詰まった状態を、今日すぐどうにかすることは出来ません。根本的解決の必要は感じつつも、唯最善の方法による移り変わりを待つより外、許されてありません。一切は時間が解決してくれます。その意味で本年一ヶ年の世相の変化は注目には値すると思えます。我等は大乘精神によってこの世界的幽鬱の中にも力強く生きぬかなくてはなりません。

## 強い生き方

### 強い生き方

私どもは「金剛の信心」を南無阿弥陀仏のみ名において獲得しました。この無我の天地が如何に広大であり、無碍であり、光明であり、そして如何に強い生き方であるかを知らされました。

南無阿弥陀仏の世界が、全身全霊を打ち出した世界である以上、強い生き方であることは当然であります。信ずるとは怖れの反対であり、不安の反対であり、疑いの反対であります。信に生きた時だけ、人は自分の全体をなげ出して事にあたります。口だけがものをいっていたり、体だけがひきづられていたり、感情だけが流れていたり、理論だけを弄んでいたりと、そうして全我を打ち出さない世界に生々とした強さがあるう筈がありません。一本の草だって、一輪の花だって、常にそれ自体を打出して、自然に、法爾に生ききつていられるではありませんか。彼は彼自らを欺かず、人を偽らず天地の相を相として、それ自身の色に輝いているではありませんか。然るに人のみが様々な技巧によつて、我自らを欺き、人を偽り、一時の平和や、賞讃や、成功や、そうしたグウダラな道草を喰つて、浅間しい墮落の暗をさまよいます。其処に何の強さがあるう。

如来の智慧光——智慧光の鉄槌がこうした一切の偽りを、はからいを自力を否定します。一切を一毛も残さず、奪いきられ、こわしきられた、どん底に輝き出づるものこそ、南無阿弥陀仏の信でありました。南無阿弥陀仏それ自体が打出され、そののみがものを云う。南無阿弥陀仏は、純粹の信であり、純粹行であります。この生活によらないで、どうして本格的な人間生活があらましよう。それは南無阿弥陀仏は如来であると共に、人間の道そのものだからであります。

### 一貫の道

我等はすでに、大信の世界に出でて、無上正真道——不退の道義——の前には、全身全霊を捧げきつて、些の悔のないことを知らされました。彼岸への絶対の、必然の召喚は、我の一切の疑いを打破り、我の全てを動かして、一貫の道を生きぬくべく我を生かしきります。

我等は道義不退、終始一貫の歩みの上のみ、人の人たる尊さを知ったのであります。美しく見えるようでも、或る日は青く化け、或る時は赤く化粧し、或る人には白く、或る人には黄と、一貫した何ものもないならしなさに、どうして感銘を持ち得ましょう。人間の本質的よろこびは、この一貫の道を発見したものにのみ与えられる特権であります。だらしない善人よりも假令悪にした処で一貫した相の人には何かがあります。然るに一切の虚偽を打ちのめされて如来の真実に生きぬこうとする不退転の念仏の行者に真のよろこびがなくていいのであらましようか。不定の道義への更生を外にして、外にどこに仏道があらましよう。すでに、仏教が一切を空じて、一切を清算して、無量寿に、無量光に人を生かそうとする無我、大信の提唱である以上、大地の涯まで、これを外にして人間の生活があらましようか。

本質的なよろこび

我等はこの信に住するが故に、必然に、生きることのよろこびを持つ。だらしのない過去の、所謂、仏教徒たちは唯、説教の中に歓喜し、幻想的幸福に酔っています。然し、我等はそれを、大信十八願の信樂、欲生の天地だとは云わない。本質的なよろこびが、涙の谷にあるものか。宿命の岩壁の手前にあるものか。無我の大信は、宿命の谷底を蹴破る力であり、因果の岩壁を超えた彼方の光明の広海であります。会堂の大衆の空気の中にあるのではなくて、生活実践の中にあるのだ。

我等は日々の生活にあたって、順風に微笑む日があり、逆境に苦しむ日がある。かつての我は、ただこの順逆二境に囚われていた。そして或る日には囚われまいと硬くなった。然し我等は今や、そのどちらからも出されたのであります。生きています。上、氷は冷たく、火は熱いことに変わりはない。苦しみは苦しみであり、楽しみは楽しみであります。然しそのどちらもが棄てがたい尊い縁であります。褒められるのが好きな凡夫でありながら、褒められなくても、微笑し得る天地であつた。世界あげての不景気は感心しない。然も本質的な人生肯定のこのよろこびを、不景気位が吹き飛ばし得るでありましょうか。

凡夫の心は、地位を、出世を名誉を得たい。だが世の気の毒な人があらゆる偽瞞によつて、そうしたものを得ようとしている日に、あなたは実力を持ちながらも、今の社会がそれを入れない。以前のあなたならば、暗くなつたであろう、自暴自棄にもなつたであろう。然るに何故に、あなたは深山の奥の桜木のように咲き得るのであります。ましよう。

何が故に病氣、不運、逆境、貧困、迫害……：……そうしたものが、本質的なよろこびを消し得ないのであります。ましようか。

無所得

我等は無所得の世界を知つた。

一切人はこの無所得の生活に入らなければならないという永遠の理想を知らしめられた。

物に囚われた生活は駄目であるが、物を軽蔑して精神生活だけを重んずることの間違いもしらしめられた。真の生活は、物質の生活の上に迄生きて来なければならぬ。物の表面だけに囚われているのが凡夫であれば、精神的な世界だけに生きようとするのが二乗である。菩薩道は、在家の真唯中、物質の真唯中に生きる道であつた。

物を集めて地獄になり、物がなくて地獄になるのは何故か。我等は、貧に囚われてもならないし富むことに囚われてもならない。徒らなる所有欲は自他共に滅ぼす。一切無所得、合掌して物の上に道を見出そうとする菩薩道は、一部の人が富に囚われて、物質の榮華のみをもつて人生の真の幸福と考へ、万人を奴隷にしても一人の享樂を通そうとするような大乘精神を知らない人の生活を認めない。かかる人生を承認しない。万人無所得にしてはじめて仏陀の精神は大地に莊嚴されるのである。万人よ、無所得に住せよ！ 本来何をもつて生れ、何をもつて死ぬるのか。汝が唯、美し

い金殿玉楼にお人形のように存在したことが単なるナンセンスであることに覚めな  
いか。

だが我等が叫ぶのは、それによつて我個人の生活を豊かにしたいためではない。我等はすでに、どんなアバラ屋の中にも、浄土を味う世界を知った。特に道のための生活者は貧しいことを恥としない。否、再び物による栄華の夢など棄てて歩むこと、この物質を超えて道義に殉ずることこそ、祖師の残した道ではなかつたか。何時の時代でも、人類のために尊ばるべき歴史的使命を果たした人たちは、必ず実践的には精神主義、理想主義的であつた。貧しい位はものの数かは、牢獄をも、首の座をも超えたではないか。説く所が何であろうとも、実践的に唯物化した社会は没落する。物質は決して一人の所得ではない。一部の人の幸福のためではない。物質に対する生活意識のはつきりしない人に本格的な生活があり得るだろうか。

現在富める者が何時までも、これを永続するために万人を奴隷とするように造り上げられた道徳が偽であるように、道のためには如何なる貧しい生活の中にもおちてゆく覚悟のないものに本格的な生活はあり得ない。

### 超出常倫

我等は、英雄主義を否定し、感傷主義を超え、善悪賢愚を超えて生きる道を恵まれた。

過去の教育は英雄主義的であつた。だが、万人の上に君臨して、権力によつて支配しようとする英雄主義の考え方が何を人生に生み出すのか。大臣大将などだけが人間で、あとは人間と見えないような社会、万人を支配する英雄主義的気分、その成就のみを成功と考える考え方、それが誤りであることは現代人にとつてはあまりに明確である。権力が生きるよりも真理こそ生きなければならぬ。真理よりも力のことを云う世界が何であるのか。釈尊や、親鸞のどこにそうしたものがあつたであろう。だが我等の我執は、無意識の間に我等を英雄主義者にする。智慧光による不断の否定によつて、我等の生活は無我でなければならぬ。其処にのみ本格的な生活がある。

強い者が英雄主義者であれば、弱い者は感傷主義者となる。センチメンタルな涙の谷に何があろう。センチメンタルな涙の谷から、安価な詩は生まれるかも知れない。だが其処には、仏教はない。如来の本願力の動きはない。智慧光にさえきつた、本格的な生活はない。

其の眼よ氷の如く冷かなれ。其の腹よ山の如く動かざれ。だがそれは春の如き温き心情を拒むものではない。情に流れて智が働かない、涙にぬれて論理のない、感情から感情に、刺激から刺激に、涙から涙への、その感傷的ならしなさに、本格的な一貫した生活のないことさえ言えれば足りる。

如来の本願の天地には、善悪はない。善悪を人にむかつてさしむけて裁く生活が間違ひであるならば、自己を善悪の型にはめて殺すのも真実の一心の天地ではない。善悪を超えない天地に本格的な生活があるものか。勿論善悪を超えよとは、悪無碍に陥れというのでもなく、本能まるだしのグウタラ生活を意味するのでもない。本願に生きる世界では、無自覚から自覚の転回を通し、善悪撰取の本願に乗託し、仏心の靈火

に燃え上る全一の信に生きる。悪人は悪人のままで安住し、善人は善人のままで満される。この満足の天地、自己全肯定の世界こそ信であった。我が我に満足出来ないものに何処に本格的な生活があろう。仏教が我等に与えたものは、徹底した充足であった。桜は桜で咲き、小草は小草で咲く。自然の相はすでにそれであった。